

真宗大谷派声明《伽陀》の研究

——音楽とその周辺——

兵庫教育大学大学院（博士課程）

澁谷由美

はじめに

声明研究はこれまで、音そのものを分析・考察することにより成果をあげてきた。しかし筆者は、背景を視野にいたうえで、音を考察する手法での研究を志している。

本稿は、真宗大谷派声明の一曲種である《伽陀（かだ）》に注目し、その周辺との関連を探究することを目的としている。

一 《伽陀》に注目する理由

真宗大谷派声明の曲種は、《経》《偈（げ）》《念仏》《和讃》《回向》《伽陀》《読み物》に大別できる。それらが現行の声明として用いられるに至った背景は未明な部分が多く、こと《伽陀》に関しては、典選定の理由すらも解されていない。

しかし《伽陀》は、常の儀式というよりはむしろ、比較的大きな儀式・法要で用いられる。また、他の曲種に比し

旋律的に豊かという特徴を有しており、特に、《経》および《表白（ひょうびやく）儀式・法要の趣旨を書き記した⁽¹⁾もの》⁽¹⁾、⁽²⁾《誦読を《登高座》で行う儀式において、《伽陀》は必須の曲といえ、他の曲種との対比のなかで、旋律的であるという特徴が、より際立ったものとなる。旋律的であることに関わるのか否かの研究は途上であるが、大谷派の声明の伝承において、たとえば《坂東曲（ばんとうおし）》のように伝承の場が限定されることなく、⁽³⁾いかなる場でも伝承の対象とされうる曲種といえる。

以上に述べた4点―①未明な部分を多く残したまま、しかし②大きな儀式・法要においては重要な曲とされており、かつ、③旋律的であるという特徴を有し、さらに、④広範に伝授される曲種といえる―が、《伽陀》に注目する主な理由である。

二 儀式・法要のなかの《伽陀》

ここでは、真宗大谷派本山において執行される儀式・法要のうち、《伽陀》が用いられる《座》についてみていく。本山で一年間に行われた儀式・法要を記録した「御堂之日記」（一九九九年、香部屋⁽⁴⁾）から、《伽陀》の名称が記載された部分を抜き出し、表化した。6項目―儀式・法要が行われた日付・どのような《座》か・その際の《座》の形態・《座》の目的および《音木（おんぎ）》の有無・用いる《伽陀》と《淘数（ゆりかず）》⁽⁶⁾・楽の有無―に分け、概要を表にまとめたものである。備考欄のアルファベットは、後掲する表に対応している。

《伽陀》が用いられる《座》のほとんどは、真宗の宗祖、親鸞の命日（毎二十八日）である（12/30座）。なお、祥月にあたる十一月は、二十八日を《結願》（けちがん）数日にわたる座の最終日）とする七昼夜（十一月二十一日から二十八日）にわたり、《報恩講》の名称で、年中行事のうちで最も重要とされる法要が営まれる。その間の《日中》は、毎座《登高座》が行われ、《伽陀》が用いられる。つまり、この年に《伽陀》が用いられた30座のうち18座

月 日	座の種類	座の形態	座の目的・音木の有無	用いる伽陀・洵	楽の有無	備考
一月四日	如信上人七百回忌御正當日中	平座	仏説阿弥陀經	先誦彌陀・八 直入弥陀・八	無	
一月廿八日	親鸞聖人月忌日中	登高座	表白(式文・嘆徳文)	伽陀五章・八	無	A
二月廿八日	親鸞聖人月忌日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀五章・八	無	A
三月廿日	総永代經	登高座	仏説阿弥陀經・有	万行之中・八 直入弥陀・八	無	B
三月廿八日	親鸞聖人月忌日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀五章・八	無	A
四月一日	師德奉讚法要	登高座	仏説阿弥陀經	万行之中・八 直入弥陀・八	有 (前後)	C
四月二日	如信上人七百回忌法要	登高座	仏説阿弥陀經	万行之中・八 直入弥陀・八	有	D
四月二日	全戦没者追悼法会法要	登高座	表白 仏説阿弥陀經・有	稽首天人・八 萬行之中・八 直入弥陀・八	有 (前後)	E
四月三日	一如上人三百回忌法要	登高座	仏説阿弥陀經	万行之中・八 直入弥陀・八	有	D
四月四日	相統禪員物故者追申会 兼帰敬式受式者物故者追申会	登高座	仏説阿弥陀經	先誦弥陀・八 直入弥陀・八	有	F
四月四日	闍如上人七回忌法要日中	登高座	仏説無量壽經(抄)・有	先誦弥陀・八 直入弥陀・八	有 (前後)	G
四月五日	闍如上人七回忌法要結願日中	登高座	仏説觀無量壽經(抄)・有 (漢音阿弥陀經)	嬰珞經中・八 万行俱廻・八 若聞此法・八	有	H

四月十二日	日中	登高座	仏説阿弥陀経・有	先請弥陀・八 直入弥陀・八	無	I
四月十三日	關如上人七回忌御正當日中	登高座	仏説阿弥陀経・有	万行之中・八 直入弥陀・八	無	B
四月廿八日	親鸞聖人月忌日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀五章・八	無	A
五月廿八日	親鸞聖人月忌日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀五章・八	無	A
六月廿八日	親鸞聖人月忌日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀五章・八	無	A
七月廿八日	親鸞聖人月忌日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀五章・八	無	A
八月廿八日	親鸞聖人月忌日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀五章・八	無	A
九月廿三日	総永代経	登高座	仏説阿弥陀経・有	先請弥陀・八 直入弥陀・八	無	I
九月廿八日	親鸞聖人月忌日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀五章・八	無	A
十月廿八日	親鸞聖人月忌日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀五章・八	無	A
十一月廿二日	初日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀五章・十	有	J
十一月廿三日	日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀五章・八	無	A
十一月廿四日	日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀五章・八	無	A
十一月廿五日	中日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀五章・八	有	K
十一月廿六日	日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀五章・八	無	A
十一月廿七日	日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀五章・八	無	A
十一月廿八日	結願日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀七章・十二	有	L
十二月廿八日	親鸞聖人月忌日中	登高座	表白(式・嘆)	伽陀五章・八	無	A
		御正忌報恩諱				

は、宗祖親鸞に関する法要である。その他には、歴代の法要等をいとなむ際に用いられていることが確認できる。また、30座中29座は、〈座〉の形態が〈登高座〉であるが、1座のみ、〈平座〉での〈伽陀〉使用も認められる。

三 検 証

(一) 〈伽陀〉およびその周辺

筆者のこれまでの研究では、〈報恩講〉中の〈登高座〉について、構成的な特徴を有していることが確認されている。⁽⁷⁾ここでは、〈伽陀〉が用いられるすべての〈座〉について同様の結果を得ることができるかを、前掲した各〈座〉の構成を検証することにより確かめる。

検証にあたり、ひとつの〈座〉に関わる事象を表に分類することを試みた。表は三区分―上から順に、法要次第／〈式事〉・〈掛役〉／〈内陣〉および〈外陣〉―に分かつ。〈式事〉は法要の進行を指示する者、〈掛役〉は〈内陣〉の給仕全般を行う者であり、いずれも〈内陣〉に関わる。最下段の〈内陣〉〈外陣〉は、さらに次のように分ける。〈導師〉は、〈座〉を導く者であり、基本的に〈内陣〉に座る。〈内陣〉に座る〈導師〉以外を〈導師外〉とした。〈導師〉と〈導師外〉は、〈内陣〉で声を発し所作をするため〈内陣〉に分類する。また、〈伽陀〉の一句目を独唱する〈伽陀師⁽⁸⁾〉は、本来〈外陣〉に座るが、〈伽陀〉の〈発声⁽⁹⁾〉は〈内陣〉で行うため中間に分類する。〈外陣〉で声を発し動作する者は、当稿では〈助音(じょいん)〉の名称で分類する。

検証対象(30座)の座の形態には、〈平座〉(1座)と〈登高座〉(29座)の二種類がある。〈平座〉で行われた1座は、〈経〉の読誦を目的としたものである。〈登高座〉の29座は、うち10座が〈経〉読誦、18座が〈表白〉拝読、残る1座は双方を兼ねた〈登高座〉である。〈表白〉拝読のみを行う18座は、宗祖親鸞を讃歎した〈報恩講私記〉および〈嘆徳文〉(両者をあわせ通称《式・嘆(しきたん)》)拝読を目的にしている。双方を兼ねた〈登高座〉の際に拝読

される《表白》は、主に、営まれる法要の目的を述べる《表白》である。

通常《登高座》は、《経導師》（《経》読誦を目的にしたもの）と《式導師》（《式・嘆》拜誦を目的にしたもの）と分類されるが、本稿ではその別には分けず、《平座》《登高座》の二種類の大別にとどめ、検証をすすめる。

表には、《内陣》《外陣》で何が行われているかを、声・動きを含め、法要次第順にあらわした。ただしここでは、法要のはじめから、ひとつの区切りを示すと思われる部分（主に《総礼（そらい）》まで）を検証する。なお、紙面の都合上、一部の表は略した。⁽¹⁾

○《平座》

法要次第	(a) 式事		内陣		外陣
	(b) 掛役		導師	導師外	
次 総礼	総礼		総礼	総礼	助音
次 伽陀 先請彌陀	(a) 伽陀の合図		導師が合掌を解いたのを確認し伽陀の合図	伽陀師	総礼
	(b) 附膚で配経 (b) 三句目で焼香		(伽陀)	伽陀発声	伽陀 附膚で配経 四句目で鑿役移動・撥さばき
次 御経 佛説阿弥陀経		調声	経いただき鑿一打で頭あげる	始経	始経 最後の経題で鑿一打

B 《経》読誦の登高座・音木あり・楽なし

法要次第		(a) 式事	内陣		外陣	
		(b) 掛役	導師	導師外	陀陀師	助音
				余間、後座出仕	出仕	出仕

次 念仏	附膚で(b)蠟燭立替		(伽陀)	式間念仏調声	伽陀	伽陀発声
次 嘆徳文	(b)代香	所作	燒香	撥かけ	別回向	(式間念仏)
次 伽陀 直入彌陀	(a)伽陀の合図	嘆徳文	嘆卷いただくのを確認し伽陀の合図			
下高座		下高座	(伽陀)			
総礼	総礼	総礼	総礼			
			伽陀	伽陀発声		
			伽陀		式間念仏	伽陀

下高座		次 伽陀 直入彌陀	次 御経 佛説阿弥陀経 音木有之	登高座				次 伽陀 萬行之中	次 総礼	先 出仕	上 臈
(b)復座後撤経		(a)伽陀の合図			(b)代香	(b)配経	(b)挿鞋直し	(a)伽陀の合図	総礼		
下高座			調声	磬一打 三礼文 磬一打 撥かけ	経箱作法	焼香	登高座		総礼	出仕	
(伽陀)		伽陀の合図	始経				(伽陀)	導師が合掌を解いた のを確認し伽陀の合 図	総礼		内陣(本間)出仕
伽陀	伽陀発声		始経				伽陀	伽陀発声	総礼		
伽陀 附膚で示経・音木役、 四句目で撥さばき			御経ひらいたら鑿二打・始経	撥さばき			伽陀 附膚で配経 四句目で示経・音木役、 鑿役移動		総礼		

D 《経》読誦の登高座・音木なし・楽あり

法要次第		(b)掛役		(a)式事	
導師	内陣	導師外	伽陀師	外陣	助音
出仕	楽				

次 総礼	下高座	総礼	(b)復座後撤華籠				(a)伽陀の合図	(b)導師撤華籠	(b)導師賦華籠	次 御経 佛説阿弥陀経	起立散華				(b)代香	
																総礼
総礼			(伽陀)				伽陀の合図	起立散華								
総礼		伽陀	伽陀発声						始経							
総礼		伽陀	平聲撥さばき						御経ひらいたら 磬一打・始経							
総礼			附物													

次 登高座楽 兼 賦華籠楽 登高座				次 伽陀 萬行之中 附物		次 総礼	次 着座楽	先 乱声 出仕						
(b)代香	(b)内陣賦華籠 鞋直し	楽三管揃って(b)挿		(b)配経	(a)伽陀の合図	総礼	(b)乱声楽止喚鐘	(a)壇行事	(b)発楽喚鐘					
磬一打	焼香	登高座				総礼		出仕						
				(伽陀)	導師が合掌を解いたのを確認し伽陀の合図	総礼		内陣(本間)出仕					余間、後座出仕	
				伽陀	伽陀発声	総礼						出仕		
				伽陀 附膚で配経 四句目で磬役 移動		総礼								出仕
		登高座楽				附物 総礼	着座楽	乱声楽止	乱声					

登高座					次 伽陀 積首天人 附物	次 総礼	次 着座楽	先 乱声 出仕				下臈				
		(b)代香		伽陀附膚で(b)配経 (b)挿鞋直し	(a)伽陀の合図	総礼		(b)乱声楽止喚鐘		(a)壇行事		(b)発楽喚鐘				
三礼文	磬一打	表白作法	焼香	登高座		総礼			出仕							
				(伽陀)	導師が合掌を解いたの を確認し伽陀の合図	総礼				内陣(本間)出仕				余間、後座出仕		
				伽陀	伽陀発声	総礼							出仕			
				伽陀 配経 示経・音木役、 鑿役移動		総礼									出仕	
				附物		総礼	着座楽	乱声楽止			乱声					出仕

次 総礼	下高座			次 伽陀 直入彌陀 附物	次 御経 佛説阿弥陀経 音木有之			次 伽陀 萬行之中 附物	次 表白				
総礼	(b)撤経			(a)伽陀の合図		伽陀附膚で(b)配経表白 さげて経箱出す		(a)伽陀の合図					
総礼	下高座				調声	経箱作法			磬一打	表白	磬二打	表白さばき	磬一打
総礼		(伽陀)		伽陀の合図	始経	(伽陀)		伽陀の合図					
総礼		伽陀	伽陀発声		始経	伽陀	伽陀発声						
総礼	伽陀 平撥さばき				磬二打・始経	伽陀 撥さばき							
総礼		附物				附物							

F 《徑》説誦の登高座・音木なし。楽あり
表Dの《伽陀》《萬行之中》を《伽陀》《先詣彌陀》に入れ替えたものと同一のため、略。

G (経) 読誦の登高座・音木あり・楽あり

登高座	(b)挿鞋直し (b)内陣配経		(a)伽陀の合図	総礼	(b)乱声楽止喚鐘	(a)壇行事	(b)発楽喚鐘											(a)式事 (b)掛役	法要次第		
																			導師	内陣	
登高座				総礼		出仕															
	(伽陀)		導師が合掌を解いたのを確認し伽陀の合図	総礼		内陣(本間)出仕				余間、後座出仕									導師外		
	伽陀	伽陀発声		総礼					出仕										伽陀師	外陣	
	伽陀 附僧で外陣配経 四句目で示経・音木役、 鑿役移動			総礼										出仕					助音		
	附物			総礼	着座楽 乱声楽止			乱声												楽	

次 登高座楽 登高座				次 伽陀 環珞経中 附物				次 着座楽				次 総礼				先 乱声 出仕 下臈											
				(a)伽陀の合図				総礼				(b)乱声楽止喚鐘				(a)壇行事				(b)発楽喚鐘							
								総礼				出仕															
				(伽陀)				導師が合掌を解いたのを 確認し伽陀の合図				総礼				内陣(本間)出仕											
				伽陀 伽陀発声				総礼												出仕							
				伽陀 附膚で配経 四句目で示経・音木役、 鑿役移動				総礼																			
				登高座楽				附物				総礼				着座楽				乱声楽止				乱声			
三礼文				磬一打				経箱作法				焼香				登高座				(b)代香				(b)内陣配経 (b)導師挿鞋直し			

	次 座楽 撤華 箏 兼 下高 下高座			次 行道散華			次 漢音阿弥陀經			次 賦華箏樂			次 伽陀 萬行俱廻 附物			次 御經 佛説観無量 壽經(抄) 音木有之		
(b) 樂止喚鐘	箏	復座後(b)内陣撤華		(b) 導師賦華箏			(b) 導師賦華箏	(b) 樂止喚鐘	(b) 内陣賦華箏	(b) 内陣挿鞋直し		(b) 撤經	(a) 伽陀の合図					
	復座	下高座		禮盤復座	行道散華	調声	磬二打										調声	磬一打
					行道散華	始經			(挿鞋直し)		(伽陀)		伽陀の合図				始經	
						始經						伽陀	伽陀発声					
						始經					伽陀 附膚で示經・音木役・ 罌役移動						撥さばき 御經ひらいたら磬二 打・始經	
			樂					樂止	賦華箏樂		附物							

先 乱声 出仕	下 臈	(a)壇行事	(b)発楽喚鐘							法要次第	(a)式事(b)掛役	内陣	導師	導師外	伽陀師	助音	楽
													導師外				

J 《式・喚》拝読・〈登高座〉・《伽陀》五章・楽あり

I 《経》説誦の登高座・音木あり・楽なし
表Bの《伽陀》〈萬行之中〉を《伽陀》〈先誦彌陀〉に入れ替えたもの同一のため、略。

次 伽陀 附物	若聞此法	(a)伽陀の合図	伽陀の合図	伽陀発声	伽陀	附物
立替	伽陀附膚で(b)蠟燭	(伽陀)	伽陀	伽陀	四句目で平鑿撥さばき	附物
総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼

次 念 仏	次 伽 陀 若 非 釋 迦 洵 十 附 物	次 式 初 段	(a)伽陀の合図	式初段	磬一打 唄文 磬一打 三礼文 磬一打	(b)代香	焼香	登高座	樂三管揃って(b)挿鞋直し	(伽陀)	導師が合掌を解いたのを確認し伽陀の合図	総礼	着座楽	乱声楽止								
															式間念仏調声	置式確認し伽陀の合図	伽陀	伽陀発声	総礼	総礼	着座楽	
															(伽陀)		伽陀	伽陀発声	総礼	着座楽	乱声楽止	

次 総礼	次 伽陀 直入彌陀 洵十 附物	次 下高座楽 下高座	次 嘆徳文	次 念仏	次 伽陀 身心毛孔 洵十 附物	次 式三段	次 念仏	次 伽陀 世尊説法 洵十 附物	次 式二段
総礼	(a)伽陀の合図				(a)伽陀の合図		附膚で(b)蠟燭立替	(a)伽陀の合図	
総礼		下高座	嘆徳友	別回向		式三段			式二段
総礼	(伽陀)	(伽陀の合図)		(式間念仏)	式間念仏調声 (伽陀)	置式確認し伽陀の合図	式間念仏調声	(伽陀) 置式確認し伽陀の合図	
総礼	伽陀 伽陀発声			(式間念仏)	伽陀 伽陀発声		(式間念仏)	伽陀 伽陀発声	(式間念仏)
総礼	伽陀			式間念仏	伽陀		式間念仏	伽陀	式間念仏
総礼	附物	下高座楽			附物			附物	

K 《式・嘆》拝読・《登高座》・《伽陀》五章・楽あり
 表Jと《伽陀》の洵数が違うのみで、他同一のため、略。

L 《式・嘆》拝読・《登高座》・《伽陀》七章・楽あり

法要次第	(a) 式事		内陣	導師外	伽陀師	外陣	助音	楽
	(b) 掛役							
先 乱声 出仕 下臈	(a) 壇行事	(b) 発楽喚鐘	出仕	内陣(本間)出仕	出仕	出仕	出仕	乱声
次 着座楽	総礼			総礼				乱声楽止
次 伽陀 稽首天人 洵十二 附物	(a) 伽陀の合図		総礼	導師が合掌を解いたのを確認し伽陀の合図	伽陀発声		伽陀	着座楽
				(伽陀)	伽陀		伽陀	総礼
								総礼
								出仕
								出仕
								出仕
								出仕

次 総礼	次 伽陀 直入彌陀 洵十二 附物	次 下高座楽 下高座	次 嘆徳文	念仏讃(坂東曲)	次 伽陀 身心毛孔 洵十二 附物	次 式三段	次 伽陀 萬行之中 洵十二 附物	念仏讃(坂東曲)
総礼	伽陀附膚で(b)撤卓	(a)伽陀の合図			(a)伽陀の合図		(a)伽陀の合図	伽陀附膚で(b)蠟燭立 替
総礼		下高座	嘆徳文	別回向		式三段		
総礼	(伽陀)	(伽陀の合図)		坂東念仏讃調声	(伽陀)	置式確認し伽陀の合図	(伽陀)	坂東念仏讃調声
総礼	伽陀	伽陀発声		(坂東念仏讃)	伽陀	伽陀発声	(伽陀)	伽陀
総礼	伽陀			坂東念仏讃	伽陀		坂東念仏讃	伽陀
総礼	附物	下高座楽			附物			附物

(二) 音の分布

前項では、座の形態（平座）／（登高座）別に、《伽陀》を含む儀式・法要を提示した。ここでは、前掲の表をもとに、儀式・法要における音の分布を探る。なお、ここで示す表は、前掲（一部掲載）した表を、音の分布に焦点をあてたうえでタイト化したものであり、音の分布は網掛けで示してある。

○（平座）

《経》読誦

法要次第	(a)式事 (b)掛役	内陣	導師	導師外	伽陀師	助音	外陣
次 総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	
次 伽陀	先請彌陀	(b)配経	(伽陀)	伽陀発声	伽陀	伽陀	配経、鑿役移動 撥さばき
次 御経	佛説阿弥陀経	調声	始経	始経	始経	始経、最後の経題の鑿一打	
次 伽陀	直入彌陀	(b)撤経	(伽陀)	伽陀発声	伽陀	伽陀、鑿役移動	

○（登高座）

A 《式・嘆》拝読・楽なし

法要次第	(a)式事 (b)掛役	内陣	導師	導師外	伽陀師	助音	外陣
次 総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	

次 総礼	法要次第	
	総礼	(b)(a)式事 掛役
	総礼	内陣 導師
	総礼	導師外
	総礼	外陣 伽陀師 助音

B 《経》読誦の登高座・音木あり・楽なし

次 総礼	次 伽陀 直入彌陀 下高座	次 嘆徳文	次 念仏	次 伽陀 身心毛孔	次 式三段	次 念仏	次 伽陀 世尊説法	次 式二段	次 念仏	次 伽陀 若非釋迦	次 式初段	次 伽陀 稽首天人 登高座
総礼				(b)蠟燭立替								(b)挿鞋直し
総礼	下高座	嘆徳文	別回向	式三段			式二段			式初段	登高座	登高座
総礼	(伽陀)		式間念仏調声	(伽陀)			式間念仏調声			(伽陀)		(伽陀)
総礼	伽陀発声		(式間念仏)	伽陀発声			伽陀発声			伽陀発声		伽陀発声
総礼	伽陀		式間念仏	伽陀			伽陀			伽陀		伽陀

法要次第	(a)式事 (b)掛役	導師	内陣	導師外	伽陀師	外陣	助音	楽

D 《経》読誦の登高座・音木なし・楽あり

次 総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼
次 伽陀 下高座 直入彌陀 附物	(b)復座後撤華籠	下高座	(伽陀)	伽陀 発声	伽陀 発声	伽陀 発声	伽陀 平鑿撥さばき	伽陀 発声	附物
次 御経 起立散華	(b)導師撤華籠	起立散華	起立散華	始経	始経	始経	始経	御経ひらいたら鑿二打	
次 伽陀 登高座 萬行之中 附物	(b)内陣賦華籠 (b)挿鞋直し	登高座	(伽陀)	伽陀 発声	伽陀 発声	伽陀 発声	伽陀	外陣配経・鑿役移動	附物
次 総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼
法要次第	(a)式事 (b)掛役	導師	導師外	外陣	伽陀師	助音		楽	

C 《経》読誦の登高座・音木なし・楽あり

次 伽陀 登高座 萬行之中	(b)配経 (b)挿鞋直し	伽陀 発声	伽陀	配経	伽陀
次 御経 佛説阿弥陀経 音木有之	調声	始経	始経	御経ひらいたら鑿二打・始経・音木	
次 伽陀 下高座 直入彌陀	(b)復座後撤経	下高座	(伽陀)	伽陀 発声	示経・音木役、鑿役移動

E 《表白》 拜読の登高座・ただし《経》に音木あり・《伽陀》三章・楽あり

次 総礼	次 伽陀 稽首天人 附物	次 総礼	法要次第	
			(a) 式事	(b) 掛役
次 告白	(b) 配経 (b) 挿鞋直し	次 総礼	内陣	導師
				導師外
次 告白	(伽陀)	次 総礼	外陣	伽陀師
				助音
次 告白	次 伽陀 稽首天人 附物	次 総礼	次 告白	楽
				次 告白

次 総礼	次 伽陀 直入彌陀 附物	次 撤華籠楽 兼 下高座楽 下高座	次 御経 佛説阿弥陀経 起立散華	次 登高座楽 兼 賦華籠楽 登高座	次 伽陀 萬行之中 附物	次 総礼
総礼		(b) 蠟燭立替	(b) 導師賦華籠 (b) 導師撤華籠	(b) 挿鞋直し (b) 内陣賦華籠		総礼
総礼		下高座	調声 起立散華	登高座		総礼
総礼	(伽陀)		始経 起立散華		(伽陀)	総礼
総礼	伽陀発声		始経		伽陀発声	総礼
総礼	伽陀 平鑿撥さばき		始経		伽陀 配経	総礼
総礼	附物	楽	御経ひらいたら鑿二打		附物	総礼
総礼				登高座楽		総礼

法要次第	(a)式事(b)掛役		内陣	導師	導師外	伽陀師	助音	楽
	総礼	総礼						
次 伽陀 瓔珞經中 附物				導師	伽陀師	伽陀 配經 示經・音木役・鑿役 移動	附物	

H 《経》読誦の登高座・音木あり・《伽陀》三章・楽あり

法要次第	(a)式事(b)掛役		内陣	導師	導師外	伽陀師	助音	楽
	総礼	(a)式事(b)掛役						
次 伽陀 先請彌陀 附物 登高座	(b)挿鞋直し	(b)内陣配經	登高座	導師	導師外	伽陀師	助音	楽
次 総礼	総礼	総礼	総礼	導師	導師外	伽陀師	助音	楽
次 伽陀 佛説無量寿經(抄) 音木有之			調声	始經	始經	伽陀 配經 示經・音木役、鑿役移動	伽陀 配經 示經・音木役、鑿役移動	附物
次 伽陀 直入彌陀 附物 下高座	(b)撤經	(b)蠟燭芯切	下高座	(伽陀)	伽陀 始經	伽陀 始經	伽陀 始經	附物
次 総礼	総礼	総礼	下高座	総礼	伽陀 始經	伽陀 始經	伽陀 始經	附物

G 《経》読誦の登高座・音木あり・楽あり

次 総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼
------	----	----	----	----	----	----	----	----

I 《經》読誦の登高座・音木あり・楽なし

法要次第	(a)式事		導師	導師外	伽陀師	助音			
	(b)掛役	内陣							
次 登高座楽 登高座	(b)内陣配経								
次 御経 佛説観無量寿経(抄) 音木有之		調声		始経	始経	経鑿・始経・音木			登高座楽
次 伽陀 萬行俱廻 附物	(b)撤経			(伽陀)	伽陀発声	伽陀 示経・音木役、鑿役 移動			附物
次 賦華籠楽	(b)内陣賦華籠 (b)内陣挿鞋直し								賦華籠楽
次 漢音阿弥陀経	(b)導師賦華籠	磬二打 調声		始経	始経	始経			
次 撤華籠楽 兼 下高座楽 下高座	(b)導師撤華籠	行道散華 礼盤復座		始経					
次 伽陀 若聞此法 附物	(b)蠟燭立替	復座 下高座		(伽陀)	伽陀発声	伽陀 平鑿搔さばき			附物
次 総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼

J 《式・嘆》 拝読・〈登高座〉・《伽陀》 五章・楽あり

法要次第	(a) 式事 (b) 掛役		内陣		外陣		楽
次 総礼	総礼	総礼	導師	導師外	伽陀師	助音	総礼
次 伽陀 稽首天人 洵十 附物		(伽陀)			伽陀発声	伽陀	附物
次 登高座楽 登高座	(b) 挿鞋直し		登高座				登高座楽
次 式初段			式初段				
次 伽陀 若非釋迦 洵十 附物		(伽陀)			伽陀発声	伽陀	附物
次 念仏		式間念仏調声		式間念仏	式間念仏	式間念仏	

次 総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼
次 伽陀 直入彌陀 下高座	(b) 復座後撤経	下高座	(伽陀)	伽陀発声	伽陀	示経・音木役・鑿役移動
次 御経 佛説阿弥陀経 音木有之		調声	始経	始経	御経ひらいたら鑿二一打	
次 伽陀 登高座 先請彌陀	(b) 挿鞋直し	登高座	(伽陀)	伽陀発声	伽陀	示経・音木役、鑿役移動
次 伽陀 登高座	(b) 配経					
次 総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼

K 《式・嘆》拝読・《登高座》・《伽陀》五章・楽あり

法要次第	(a)式事 (b)掛役	内陣	導師	導師外	伽陀師	助音	楽
次 総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	伽陀師	総礼	総礼
次 伽陀 稽首天人 淘八 附物				(伽陀)	伽陀発声	伽陀	附物
次 登高座楽 登高座	(b)挿鞋直し	登高座					登高座楽
次 式初段		式初段					

次 式二段	(b)蠟燭立替	式二段		(伽陀)	伽陀発声	伽陀	附物
次 伽陀 世尊說法 淘十 附物				(伽陀)	伽陀発声	伽陀	附物
次 念仏				式間念仏調声	(式間念仏)	式間念仏	
次 式三段		式三段					
次 伽陀 身心毛孔 淘十 附物				(伽陀)	伽陀発声	伽陀	附物
次 念仏			別回向	式間念仏調声	(式間念仏)	式間念仏	
次 嘆徳文		嘆徳文					
次 下高座楽 下高座		下高座					下高座楽
次 伽陀 直入彌陀 淘十 附物				(伽陀)	伽陀発声	伽陀	附物
次 総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼	総礼

L 《式・嘆》拝読・〈登高座〉・《伽陀》七章・楽あり

次 法要次第										
次 総礼	総礼	(a) 式事 (b) 掛役	内陣	導師	導師外	伽陀師	助音	楽		
次 伽陀 稽首天人 洵十二 附物					(伽陀)	伽陀発声	伽陀	附物		
次 登高座楽	(b) 挿鞋直し							登高座楽		

次 伽陀 若非釋迦 洵八 附物					(伽陀)	伽陀発声	伽陀	附物		
次 式二段		(b) 蠟燭立替		式二段						
次 伽陀 世尊説法 洵八 附物					(伽陀)	伽陀発声	伽陀	附物		
次 念仏					式間念仏調声	(式間念仏)	伽陀			
次 式三段				式三段						
次 伽陀 身心毛孔 洵八 附物					(伽陀)	伽陀発声	伽陀	附物		
次 念仏					式間念仏調声	(式間念仏)	式間念仏			
次 嘆徳文				嘆徳文						
次 下高座楽 下高座				下高座				下高座楽		
次 伽陀 直入彌陀 洵八 附物					(伽陀)	伽陀発声	伽陀	附物		
次 総礼	総礼		総礼		総礼	伽陀発声	総礼	総礼		

次 總礼	次 伽陀 直入彌陀 洵十二 附物	次 下高座楽 下高座	次 嘆徳文	次 念仏讚(坂東曲)	次 伽陀 身心毛孔 洵十二 附物	次 式三段	次 伽陀 萬行之中 洵十二 附物	次 念仏讚(坂東曲)	次 伽陀 世尊說法 洵十二 附物	次 式二段	次 伽陀 何期今日 洵十二 附物	次 念仏讚(坂東曲)	次 伽陀 若非釋迦 洵十二 附物	次 式初段	登高座
總礼	(b)撤卓							(b)蠟燭立替					(b)配卓		
總礼		下高座	嘆徳文	別回向		式三段				式二段				式初段	登高座
總礼	(伽陀)			坂東念仏讚調声	(伽陀)		(伽陀)	坂東念仏讚調声	(伽陀)		(伽陀)	坂東念仏讚調声	(伽陀)		
總礼	伽陀発声			(坂東念仏讚)	伽陀発声		伽陀発声	(坂東念仏讚)	伽陀発声		伽陀発声	(坂東念仏讚)	伽陀発声		
總礼	伽陀			坂東念仏讚	伽陀		伽陀		伽陀		伽陀	坂東念仏讚	伽陀		
總礼	附物	下高座楽			附物		附物		附物		附物		附物		

四 分析と考察

(一) 〈伽陀〉の配置

音の分布に焦点をあて、三の(二)に示した表をさらに整理する(図1～9参照)。《経》読誦の表は図1～5に、《表白》拝読・《経》読誦を兼ねた〈座〉の表は図6に、《表白》(《式・嘆》)拝読の表は図7～9に、それぞれまとめた。図1は〈平座〉の、また図2は〈登高座〉・楽なしでの音分布図である。図1・2の音分布部に、違いは認められない。両図の違いは、《伽陀》①②の最中の、導師による〈登高座〉の有無である。すなわち図1・2から、〈座〉の形態の違い―〈平座〉〈登高座〉―にかかわらず、《経》読誦の前後に《伽陀》が配され、〈登高座〉の場合は、《伽陀》曲中に導師の〈登壇〉があることが見てとれよう。

図3～6は、〈登高座〉・楽入りの音分布を示している。楽入りの法要形態には二種類あり、図中、楽の欄でその別は確認できる。ひとつは〈附物〉の語が(図3・6参照)、もうひとつは〈附物〉〈楽〉の語が記されてある(図4・5参照)。着座・退出のみに楽を用いる場合は、法要中、図化した部分に楽が入るのは〈附物〉においてのみである。〈附物〉とは、楽が声明に「付く」ことを表した語であり、四句から成る《伽陀》では、三・四句目に声明の旋律と同じふしが楽でも奏される。〈楽〉の語は〈登壇〉中の奏楽を示すものである。

入楽の場合であっても、〈登壇〉中に奏楽がない場合(図3参照)、音分布図は、〈附物〉以外は楽の入らない図1・2と同じであり、文字通り、楽は「附いている」にすぎないと解せよう。つまり、《伽陀》が前後に配されているところこそが重要といえはしないか。

図4・5は、〈登壇〉中に奏楽がある場合である。図4であらわされる儀式・法要では、《伽陀》①が終わり次第、また読経が終わり次第、導師が〈登・下高座〉し終えるまでの間、楽曲が奏される。ただし、図2・3に《伽陀》で

	下高座	読経	登高座		導師	内陣
	伽陀②			伽陀①	導師外	外陣
					伽陀師	
					助音	
附物	楽		楽	附物		楽

図4

	読経		導師	内陣
伽陀②		伽陀①	導師外	外陣
			伽陀師	
			助音	

図1

	下高座	漢音阿弥陀経		読経	登高座	導師	内陣
	伽陀③			伽陀②		導師外	外陣
						伽陀師	
						助音	
附物	楽		楽	附物	楽	附物	楽

図5

下高座	読経	登高座	導師	内陣
伽陀②		伽陀①	導師外	外陣
			伽陀師	
			助音	

図2

	下高座	読経	表白	登高座	導師	内陣
	伽陀③			伽陀①	導師外	外陣
		伽陀②			伽陀師	
					助音	
附物		附物		附物		楽

図6

下高座	読経	登高座	導師	内陣
伽陀②		伽陀①	導師外	外陣
			伽陀師	
			助音	
附物		附物		楽

図3

下高座	嘆徳文	別回向		式三段			式二段			式初段	登高座	導師	内陣	
伽陀⑤		式間念仏	伽陀④		式間念仏	伽陀③		式間念仏	伽陀②		伽陀①	導師外		外陣
												伽陀師		

図7

	下高座	嘆徳文	別回向		式三段			式二段			式初段	登高座	導師	内陣	
伽陀⑤			式間念仏	伽陀④		式間念仏	伽陀③		式間念仏	伽陀②		伽陀①	導師外		外陣
													伽陀師		
附物	楽			附物			附物			附物		楽	附物	楽	

図8

	下高座	嘆徳文	別回向		式三段			式二段			式初段	登高座	導師	内陣		
伽陀⑦			坂東念仏讃	伽陀⑥		伽陀⑤	坂東念仏讃	伽陀④		伽陀③	坂東念仏讃	伽陀②	伽陀①		導師外	外陣
															伽陀師	
附物	楽			附物		附物		附物		附物		楽	附物	楽		

図9

の《登・下高座》が確認されるように、《登・下高座》の間、楽は必須というわけではなく、よって図1-3と同様に、《伽陀》の配置に目するべきであろう。

《伽陀》の配置に目を向け、図1-6を見たとき、《伽陀》は、何かの前後に—たとえば、図6においては《伽陀》①と②とで《表白》を挟み、《伽陀》②と③は読経を挟むというように—配されていることが確認できる。さらに、《伽陀》三章の図から(図5・6参照)、真中に配された《伽陀》は(両図とも②に相当)、《伽陀》①とともに何かを挟む役割と、《伽陀》③とともに別の何かを挟む役割とを兼ねており、その配置から、ふたつのものをつなぐ役割をも兼ね備えていると捉えられよう。

ここで、《式導師》の《登高座》における《伽陀》の配置についてみていく。図7-9がそれにあたり、順に、《伽陀》五章・楽なし/同・楽あり/《伽陀》七章・楽あり、の音分布図である。

図7-9の《伽陀》の配置は、図1-6と同様の規則性—何かの前後、かつ、その連続性—が確認でき、間に配された《伽陀》による連鎖は、いっそう明確なものとなる。すなわち図7-8中の《伽陀》②は①とともに《式初段》を挟み、さらに③とともに《式間念仏》および《式二段》をはさむ。《伽陀》③も同様に、《伽陀》②とともに《式間念仏》と《式二段》を挟むと同時に④とは《式間念仏》《式三段》を挟む、というように、《伽陀》により、儀式・法要が順次運ばれると解せる。《伽陀》を七章で用いる図9では、さらに配置の規則性が際立つ。《伽陀》は、《登高座》中の《導師》の声(《式文》拝読)を挟み、続いて真宗大谷派声明のなかで、唯一身体性を伴う特異な声明曲《坂東念仏讚》を挟む、というものである。この交互に配された規則性のなかで、法要は進行する。

さらに図1-9の様相からは、隣りあった《伽陀》の連鎖関係のみならず、すべての図において、両端を《伽陀》で挟まれた構造も確認できる。これは、《伽陀》の前後を排したことによる現象ではない。分析対象30座中27座では、両端の《伽陀》をさらに挟むように《総礼》が配されており(前掲表参照)、ひとつの《座》における区切りをあらわ

していると考えられよう。すなわち音分布図の《伽陀》配置は、局部・全体にかかわらず、《伽陀》による「ふちどり」の構造を明示しているといえる。

局部の「ふちどり」は、《伽陀》が交互に配されることにより、a b aの形式、すなわちひとつの対称をつくりだす。全体の「ふちどり」からも、《伽陀》は二章・三章・五章・七章のいずれも、対称が呈示され、興味深い。

(二) 《伽陀》の役割

ここでは、前述の分析から、その配置による役割、さらに、配される理由についての考察へと発展させたい。

「まず、ふちどり」の如く配された《伽陀》が、「ふちどる」ものは何かを図中にみていく。

《経》読誦を目的とした《座》である図1-6では、《伽陀》によって読誦、つまり《経》がふちどられていることが確認できる。《経》読誦に加え、《表白》拝読をも兼ねた《座》を示した図6では、その双方、つまり《表白》《経》ともに《伽陀》によってふちどられている。《式・嘆》拝読を図示した図7-9では、三段から成る《報恩講私記》および《嘆徳文》がそれぞれに、つまり四つに分割される目的をひとつずつふちどるように《伽陀》は配されているのである。すなわち《伽陀》の配置は、儀式・法要の目的である部分、つまり重要とする、もしくは主とする部分をふちどっていると解せよう。

ただし、《伽陀》が他の二つでふちどられているとも言い換えられる。いずれも、ふちどりの形式は、a b aである。

ふちどりの形式—a b a—は、音のコントラストの形式をも兼ねる。図1-9に見られる曲種のうち、《経》《表白》《式間念仏》は、低音で坦々とした音として表現される。いずれも音高の変化に乏しく、大谷派声明曲のなかでも旋律的な《伽陀》とは対照的である。特に《表白》は《導師》ひとりの声で拝読され、《伽陀》とのコントラスト

は、「単対多」に強調され、より鮮明になる。

比較的高音で、かつ旋律的な音楽が奏されると、確かに聴衆は惹きつけられる。しかし続けて対照的な音楽が奏された場合、その対比が顕著であれば、後者の音楽にも、前者同様に惹きつけられる。すなわち、音のコントラストは、聴衆に心的に与える効果と相關する。

《伽陀》による「ふちどり」は、細部では、規則的な配置により《座》に対称をつくりだし、さらに対称は強調を生み、強調は音の対峙による相乗でさらに強力なものとなる。その「ふちどり」の繰り返しは、《伽陀》と周辺との相關を密にさせ、すなわち《伽陀》により《座》は興起されるといえよう。

一方、《伽陀》は機能的にもはたらいっている。それは、《伽陀》中に行われる《内陣》および《外陣》での所作・動作の存在にうかがえる。楽なしの場合、《導師》の《登・下高座》は必ず《伽陀》中である。また、《掛役》の動きの大半―《経》読誦の際の配経・撤経、《導師》の《登壇》準備として《挿鞋》（そうかい）《登高座》に必需なはきもの）の向きをかえる《挿鞋直し》、蠟燭の立て替えおよび芯切り等々―も《伽陀》中に行われる。《外陣》では、《経》読誦の場合、配経および《経鑿（きょうさく）》の《撥》作法である《撥さばき》、《音木》が入る場合は《示経・音木役》の移動等が《伽陀》中に行われる。

これらは、「伽陀は楽に準ずる」と伝えられることに関連するのではないか。

《経》や《念仏》の最中に、無駄に動くことや生理現象である咳・あくびまでも、できるかぎり控えるように言われるのに対し、《伽陀》中および楽中に動くことは可とされている。同様に、前述のような所作・動作の数々が《伽陀》中に行われると考えられよう。そして、そのような《伽陀》があるからこそ、儀式・法要中の所作・動作をする時間が生じ、円滑に、滞りなく儀式・法要は進行する。

《伽陀》は、機能的な役割を担いながらも、構成・音により《座》の目的を際立たせる実相を有している。すなわ

ち、周辺との有機的な関係の中に、《伽陀》の存在意義をうかがい知ることができるのである。

おわりに

以上に、真宗大谷派声明曲《伽陀》を、儀式・法要における位置づけ―配置・はたらき―から考察した。これまでの研究から得た当派声明の特徴―曖昧で複雑、しかし多様で豊か―に加え、多面からながめることにより、複雑で錯綜した、しかし合理的なありようが浮かび上がった。

「伽陀は楽に準ずる」の語は、声明と楽とを分け、《伽陀》は声明曲ではなく、一般に芸術に類される音楽の仲間であることを形容したとも受けとれる。声明でもあり音楽でもある、という中間的な地歩は、《伽陀師》の、やはり中間的な立場―《調声》ではなく《発声》の語を用いること・《発声》を《内陣》で行うこと等―とも重なり、その関連が興味深い。本研究から導き出された伽陀の「中間的立場」という特性について、今後さらに多角的に考察していきたい。

注

- (1) 通常、《経導師》により拝読される《表白》と、《式導師》が拝読する《表白》（《報恩講私記》と《嘆徳文》）とは区別されるが、本稿ではどちらも曲種《説み物》に含む《表白》として分類している。
- (2) 《内陣》の中央部に置かれた《札盤》（らいはん）台に半畳で厚みのある畳をおいたもの）に登ること。また、その作法（Ⅱ《登高座作法》）。動作として用いる場合は《登壇》（とうだん）とも言う。
- (3) 《坂東曲》（Ⅱ《坂東念仏讃》）の伝承は本山のみに限定されており、実施を含み、他での伝承は行われない。
- (4) 本山では、定衆・堂衆・参衆により、それぞれの部屋（順に、定衆部屋・香部屋・参衆部屋）において、記す内容には違いがあるものの、毎日の法座が記録されている。

- (5) 真宗大谷派声明で用いる音具のひとつ。多人数での説経の際、リズムの統一をはかるために用いられる。
- (6) 〈洵(ゆり)〉に対する明確な説明は、口頭においても、また、書き付けられたものにも、なされていない。あえて説明を付すならば、ある音を何度も繰り返すことをさす。〈洵〉の数で分類した種類として、〈二洵〉〈三洵〉〈五三洵〉〈五洵〉〈八洵〉〈十洵〉〈十二洵〉があり、〈伽陀〉の洵には八・十・十二の三種がある。

(7) 拙稿「真宗大谷派声明の研究―報恩講における〈登高座作法〉について―(一九九九『芸術教育実践学』二二八―三四) 参照

(8) 〈伽陀〉は七言四句から成る漢詩である。一句目は独唱部分であり、独唱者を〈伽陀師〉という。

(9) 独唱部分は、〈調声〉〈発声〉の二種を使い分け、〈伽陀〉のみ〈発声〉を用いる。

(10) 〈伽陀師〉が〈発声〉する場所は〈内陣〉と決定されているわけではない。ただし本稿での分析対象は本山で行われる儀式・法要であり、本山では必ず〈内陣〉から〈発声〉する。

(11) 掲載に際し考慮した内容は、次の五点である。①座の形態(平座(へいざ)／(登高座)／(二座の目的(経)説誦／(表白)拜読)③その際の音木の有無④用いる伽陀の数⑤楽の有無

謝辞

本稿執筆にあたり、資料の閲覧を快く許可くださいました東本願寺式務部、法要のながれについてご教示たまりました光善寺住職 藤原暢信氏・岐阜教区准堂衆会のみなさまに感謝申し上げます。また、最終校閲をお引き受けいただきました式務部堂衆 仁科和志氏にも大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。